

| | |
|----------|-------------------------|
| 氏名 | すぎ はら やす し 杉 原 保 史 |
| 学位(専攻分野) | 博 士 (教育 学) |
| 学位記番号 | 論 教 博 第 99 号 |
| 学位授与の日付 | 平 成 14 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当 |
| 学位論文題目 | 「平穩な青年期」を生きる青年の諸相 |

論文調査委員 (主査) 教授 岡田康伸 教授 東山紘久 教授 藤原勝紀

論 文 内 容 の 要 旨

心理学の研究方法はいわゆる自然科学的な法則定立的な方法と個性記述的、事例研究的な方法に2分されて考えられる。臨床心理学では後者の方法によるところが大きく、また、その方法の科学性、客観性をいかに補っていくかを問題にする。本論文では3つの研究方法すなわち、実験的方法と調査法と臨床事例研究法により研究を進めているのが特徴的である。実験法として、第2章の「過剰適応と自発性の抑制」、調査法として、第3章の「アイデンティティ・ステイタスにおける早期完了型について」臨床事例研究法として、第4章の「過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について」と第5章の「消極適応的な青年について」がある。以下、章を追って、本論文の要約を述べていきたい。

第1章では「平穩な学生」をテーマにした問題意識が述べられている。スタンレイ ホール (Stanley Hall) が青年期を「疾風怒涛」ととらえ、青年期は危機的、難しい時であるという青年期危機説を主張して以来この考え方が支配的であった。しかし、ドヴァンとアデルソン (Douvan and Adelson) はそのような危機的な問題を呈する青年は少数であり、青年期は他の時期と比べそれほど危機的な時期というわけではないと青年期平穩説をとらえた。彼らは3000人の調査によってこの考えを裏づけた。また、オファーとサブシン (Offer and Sabshin) は106名の縦断的な面接調査法で青年は攻撃的・性的衝動に十分対処できる自我を備えていることを示した。著者はこれらの説をレビューし、このような単純な2分法に陥らない立場を目指すものであることを主張した。

第2章は過剰な外的適応は人格的なレベルでの自発性の抑制を導くということを内発的動機づけに関する実験的研究から検証しようとした。パズル実験課題を施行した被験者は大学生40名である。あらかじめ263名にTAQ (Test Anxiety Questionnaire) をし、その高テスト不安群20名、低テスト不安群20名を選ぶ。その中から2つの処遇条件 (非テスト条件とテスト条件) に10名づつに分けた。テスト不安の高い青年はテスト課題に対して自発的な接近行動を示したが、内発的動機づけの現れというよりも、総合的に考えて不安を鎮めるための防衛的な行動と解釈されうることを示した。

第3章は早期完了型に入る青年についての面接法や心理検査による調査を施した研究である。この青年は、予備調査として167名の男子大学生を対象に、自我同一性地位調査と文章完成法を施行し、早期完了型の典型例として選ばれた8名の内の1名である。早期完了型とはマーシア (Marcia) によってなされたアイデンティティ・ステイタスの4つの型 (アイデンティティ達成型とモトリアム型と早期完了型とアイデンティティ拡散型) の一つであり、迷いや混乱を示すことなくコミットメントをしめす青年という。この青年についての所見により早期完了型についての理解を深めようとした。この青年はむしろ潜在的な拡散傾向を仮定することが妥当であるということが示唆された。特に、この青年のロールシャッハテストの結果は質問紙法などの情報だけではそれによって潜在的なところの理解までは理解できていないことを示していようと指摘した。

第4章はストレスがかかると倒れるのではないかと不安をもつ文系学部3年生男子大学生の事例がとりあげられた。早期完了型で、過剰適応と考えられていたこの学生は2年半にわたる面接でモトリアム型へ移行したことが示めされた。親子関係や権威主義的傾向などから考察され、過剰適応的な青年の発達を促すいくつかの作業を指摘した。

第5章は大学4回生男子のケースである。父親からの申し込みで、主訴は「元気がない、燃え尽き症候群のよう」である。約半年にわたる20回の個人面接の報告で、消極適応という概念の提唱をした。面倒を避けるための適応競争の回避、自発性の抑制などの特徴を明らかにした。消極適応的な青年はアイデンティティ拡散型に属し、生活は一見当たり前に営まれ、問題をかかえたままで社会的に成功した成人となっていくのかもしれないと論じた。また、その援助としては家族の状況を反映することをどの程度まで避けられるかが大切というレヴンソン (Levenson) の考えがたいせつであると主張した。

第6章は「平穏な青年期のアイデンティティ形成—受動的アイデンティティ形成とその能動的再編」と題され、総合的考察がなされた。「平穏で適応的と見える青年のヴァリエーション」や受動的アイデンティティ形成や能動的アイデンティティ形成などを論じた。また、不安に目を向け、何らかの方法によってそこに安全感をもたらすことがアイデンティティ・ステータスの移行を可能にするなどと論じた。

論文審査の結果の要旨

本研究は著者が学生相談カウンセラーとして臨床現場に足場を置いている経験をもとにしたものである。「学生相談は単に心理的な病的症状を示す学生を心理治療するためだけの機関でなく、人格的にみて学生がより充実した学生生活を送り、その中で発達・成長を遂げていくことができるように援助する機関である。」という著者らの考えから、相談室を相談に訪れることのない適応的な青年たちの心理的な生活の質に関心をもち続けていることから得られたテーマでもある。すなわち、「平穏に」青年期を過ごしているようにみえる青年をいろいろな角度から考察したものである。

青年期はスタンレー ホールらが主張した「疾風怒涛」や「難しい時期」や「反抗や悩みがつきものの時期」などの危機説とドヴァンやオファーが提唱した「青年期はそれほど危機的な時期ではないのではないか」の平穏説とに二分するのではなく、青年の発達過程を促進し、援助するにはどのような知恵や工夫が必要かに迫ろうとしたことは評価できるとされた。まず、話題になったのは、「平穏とは何か」である。これを考えるとなかなかむつかしい。本論文では、適応している青年のみならず、過剰適応的な青年、消極適応的な青年を含めてかんがえられている。過剰適応的な青年とは早期完了型に属し、強烈な不安に駆られているが、適応的であり、自発性が抑制されている。消極的な青年とはアイデンティティ拡散型に属し、強烈な不安はなく、適応的である。しかし、自発性が抑制されており、苦痛の欠如がみられる。問題を相談にこない学生はこの時点では外的に適応していることになるが、突然「きれる」こともある。このような学生を適応しているか、不適応かといった視点ではわかりにくい。むしろ、これらを整理するものとしてみかけの部分と内的な部分あるいは、起こっている問題と青年がかかえている課題とに区別することで、「平穏とは何か」をもう少しクリアーにできるだろう。と話し合われた。

次に検討されたことは、方法論についてである。本論文で使われている「方法論」という用語はむしろ、単に研究方法であって、方法論まで高められていないという指摘がまずあった。しかし、3つの方法、すなわち、実験的方法と調査法と臨床事例研究法が本テーマの研究に使用されたのは、多角的に研究されたことになり、有意義であり、評価された。さらに、これらを含めたものが青年期テーマの研究方法として、確立させ、今後、方法論として高める方向づけを試みてもらいたいなどの期待が述べられた。

次に話されたのは、ないものねだりになるかもしれないが、社会的背景も大事なことなので少しは触れてほしかったということである。ミードの「サモアの思春期」研究ではサモアの青年はニューヨークの青年のような問題や混乱を起こさないわけだし、それは社会制度と関係しているだろうからである。

次の話題は「青年期」についてである。青年期は幅が広く、焦点がぼやけてくる。青年期というよりもここでは大学生としたほうがより適当であろう。著者は学生相談に携わっており、実践との関係をもう少し大きく扱うことで平穏な大学生の問題が描けるのではないかと指摘される。

また、少し細くなるが、しかし、根本的な問題でもあることとして、例示されているロールシャッハについて議論があった。ロールシャッハテストのスコアで人間運動の記号化でMにマイナスがつくのは病的サインであり、たとえ、この青年が拡散型に属するだろうと考えられ、潜在的な問題をもっているかもしれないと指摘されていても、これが「平穏な青年の範疇にはいるのか」という問題提起である。単にスコアリングの問題か、この事例の底にMマイナスとなるほどの病理

があるのかと議論された。著者はMマイナスであるが、評者（審査者）にはみえなくもないので、マイナスではないのではないかということで、一応の議論の決着をみた。この例でもわかるように人格の判定はなかなかむづかしい。人が「平穩であるか否か」の判断もむづかしい。このむづかしい研究を取り上げ、青年期研究へ一石を投じたことは十分に博士論文として価値あると評価された。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成14年2月7日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。